

研究所ニュース No.53 2016.2.29



特定非営利活動法人

非営利・協同総合研究所いのちとくらし

〒113-0034 東京都文京区湯島 2-7-8 東京労音お茶の水センター2階

Tel. 03-5840-6567 Fax. 03-5840-6568

E-mail: inoci@inhcc.org <http://www.inhcc.org>

【理事長のページ】(No.53)

大学人は戦う

中川 雄一郎

昨年 11 月 30 日発行の「研究所ニュース (No.52)」の「理事長のページ欄」に「闘いすんで日が暮れて」と題する、今では忘れ去られた感のある、しかしそれでも知る人ぞ知る、「心の哀愁」と言うべきか、それとも「欲望の愛執」と言うべきか、はたまた「欲に憑りつかれた人間の愛着」と言うべきか、いずれにしても作家・佐藤愛子の「経験談的言葉」の意味を私流に翻訳し、解釈した私の「闘病報告」の駄文を載せていただいた。結局、私の肉体が日常生活にどうにか耐えられるようになったのは、3 回目の手術である「鼠径ヘルニア」の手術を終え、10 月 29 日に退院してからおよそ 2 週間後であった。この「およそ 2 週間後」の 11 月 14 日 (土) 午後 1 時 30 分より明治大学のリバティタワーの大教室を埋めた重要な 2 回目の「戦争をしない、させない、さらにもう一步前へ・安保法の廃棄を求める千代田 4 大学共同講演会」が開催された。私はこの講演会には「心身ともに健康体」で参加することができた。この集会は、自公政権と安倍内閣が憲法に違反し、立憲主義を破壊し、したがってまた、民主主義を蹂躪する戦争法案 (安保関連法案) の強行採決を糾弾するそれであった。この講演会では SEALs とママの会のスピーチおよび「法学者は語る」と「政治学者は語る」と題した講演が行われた。

実は私は、この 2 回目の集会の前の、9 月 15 日 (火) に明治大学で開催された 1 回目の『『安全保障関連法案』の廃案を求める千代田 4 大学 (主催: 明治大学九条の会・安保関連法に反対するオール明治の会・憲法を考える法政大学教職員の会・専修大学九条の会・日本大学九条の会・安保関連法案を求める日本大学教員の会、後援: 明治大学教職員組合・千代田九条の会) 共同講演会』には責任者でありながら参加できなかった。同じ「9 月 15 日」に私は「尿管結石」の手術を受けなければならなかったからである。この共同講演会は午後 6:00~20:00 に明治大学リバティホールで開催され、明治大学法学部の浦田一郎教授と法政大学法科大学院の宮崎礼壹教授が講演された。浦田教授は『『安保法制』議論と市民の役割』と題する講演を、宮崎教授は『『安保法制』法案の違憲性について』と題する講演を行った。2 回にわたって行われた「千代田 4 大学共同講演会」は首都圏の大学の連携を創り出す成果を生み出した。

「安保法」(戦争法) に対する法学者の問題意識は極めて高い。明治大学では 11 月末に

法学部が主催する安保法反対の集会が開催された。この集会を経て、明治大学では法学部とオール明治の会の連携の基で、2016年4月23日（土）（午後12:30会場、13:30開会）に1,300人収納可能な明治大学アカデミーホールにおいて「金子兜太さんと平和・憲法を語る集い」（入場無料）を開催する。主催・明治大学法学部、後援が安全保障関連法に反対するオール明治の会、安保法制の廃止を求める日本大学関係者の会、安全保障関連法に反対する専修大学有志の会、千代田九条の会、科学者九条の会、大月書店、明治大学教職員組合。そして安全保障関連法に反対する学習院・学習院女子大学、立教大学、早稲田大学、慶応大学、東京学芸大学、東京芸術大学、東京大学、中央大学、創価大学・創価女子短期大学、青山学院、上智大学、東京理科大学など19大学の有志の会と東京私大教連が協賛する。協賛する大学はもっと増えるだろう。「会場を満杯にし、戦争法に反対する巨大な大学人の力を創り出そう」と私も老体に鞭打って走っているところである。

この「語る集い」のプログラムは次のようである。

金子兜太（俳人）と黒田杏子（俳人）の対話講演
アンサンブル・フォー・ピース（合奏と合唱）
憲法の朗読
スピーチ（学長・総長、SEALDs、ママの会）
制服向上委員会ミニコンサート

明治大学ではその他にも学生九条の会や科学者九条の会の訴えや講演会が行われており、4月23日に向けての会議や情報交換、ビラの配布や掲示が頻繁になされており、「体力の消耗を回復する暇もなく、ただただ耐力を鍛えている」という状態である。そう言えば、誰かが呟いていたな。「さて、一献傾けにいこうか。戦いすんで日が暮れてだ。何しろ大学人は戦う者なのだ」。

ところで、遅ればせながら昨年6月に7~8人集まってコーヒーを飲みながら「安保法案に反対するオール明治の会」設立を談義し、その結果、名称を「安保関連法案に反対するオール明治の会」とし、設立の「呼びかけ人」として50人ほどの方々をお願いしようということになり、そして「村山富市元首相に呼びかけ人になっていただくよう依頼する」責任が私に舞い込んできた。「村山元首相が政経学部の出身だから」という理由である。グズグズしてはられないので、早速、村山さんに電話して了承していただいた。一度そういう役を引き受けると、どういう訳か「村山元首相」への「お願い」は私の役目となる。「政経学部の呼びかけ人」は私だけではないのだが、依然として私の役目になっている。「尿管結石の手術」のために私が参加できなかった最初の集会である「千代田4大学共同講演会」のメッセージを村山さんからいただくお願いも私の役目であった。村山さんはメッセージをすんなり引き受けてくださった。私のパソコンにそのメッセージがあるので、それを紹介して「理事長のページ」を閉めることにする。

私は「安全保障関連法案（安保法案）に反対するオール明治の会」呼びかけ人の一人として、「オール明治の会」主催による本日の「安保法案反対シンポジウム」に参加された皆さまにメッセージを送ります。

皆さまもご存じのように、明治大学建学の精神は「権利自由・独立自治」です。この精神は、「個人の権利と自由を承認し、学問の独立を保障する」社会を創り、発

展させることこそ明治大学の使命である、との理念を謳っているものです。明治大学の大学人が、建学から今日まで130余年の長きにわたって、この使命、理念を堅持してきたのは、平和な社会と人びとの幸福の実現を目指してきたからに外なりません。

ところが、安倍政権は、武器輸出を視野に入れた「産官学の結集力を軍事分野にも有用活用せよ」と主張しています。先般、「防衛省」が軍事につながる基礎研究を初めて公募したのはその一環です。これは、既に1950年に日本学術会議が総会において「戦争を目的とする科学の研究には今後絶対に従わない」との決意を示して、日本の大学と研究者が軍事研究を拒否してきたことへの「挑戦」だと言わなければなりません。「安保関連法案」が「戦争法案」と呼ばれる所以はここにも厳然として存在しています。

本シンポジウムに参加された皆さま、安倍政権によるこのように危険な「安保法案」に反対し、明治大学建学の精神である「権利自由・独立自治」が希求する「平和な社会と人びとの幸福の実現のために、共に前へ進みましょう。

(なががわ ゆういちろう、理事長・明治大学教授)

【副理事長のページ】(No. 53)

貧困への大学生の怒りと民主党政権の経験

後藤 道夫

戦争法制反対闘争で活躍した「シールズ」の若者たちのスピーチをみると、戦争法だけでなく、今の社会と政治全体にたいする強い違和感や怒りが表明されている。数は多くないが貧困問題を焦点としたスピーチがあり、これほどひどい貧困を放置し続ける政権が、「国民の安全」などと言っても、およそ信用できないという言い方もあった。秋以降に二回行われた「エキタス」というグループの最低賃金デモでは、より鮮明に現在の貧困とひどい労働処遇がスピーチの主題となっている。

シールズ、エキタスともに YouTube で視聴可能なものが多く、文字になっているものも少なくない。それらをたよりに、数人の若者のスピーチの分析を試みた。貧困問題にかかわった発言のみが対象だが、筆者は以下の特徴に強い関心をもった。

まず、話し手自身が、総合的、多面的な貧困状態を経験しているか、あるいはそうした経験をした若者と近い位置にいて、そうした経験を強く内面化し、感情を共にしている。そこでは、ひどい労働処遇、母子家庭など<ジェンダーと貧困>問題、傷病による貧困、貧困な家族を若者が背負う苦しみ、社会保障のあまりの脆弱さなどがリアルに語られる。つまり、深刻で重層的な貧困の経験者あるいはその同伴者が、鮮明な言葉で事態を告発し、怒りを表明しているのである。2009年、2010年の反貧困運動では、当事者自身の怒り、告発のスピーチは目立っていなかった。

また、貧困者の自己責任を問い、<努力の足りなさ>を責め合う、国民のいわば<相互抑圧状態>への強い怒り、拒否、対抗の姿勢が鮮明である。解決の方法として「社会保障と労働組合」を強く主張するスピーチもある。障害・傷病等による不利と貧困・環境による不利とを連続的・一体的なものとしてつかむ感性も、こうしたとらえ方とつながっているようだ。

くわえて、デモに参加できる大学生あるいは学卒という社会的位置が自覚され、学習できない、声を出せない多くの人たち、アルバイトで動けない学生たちのかわりに勉強し、声を出すという感覚も鮮明である。その際、＜無知＞であること、動けないことは非難の対象ではなく、そうした状態に置かれた人々への強い共感が読み取れる語り口となっている。

シールズやエキタスのスピーチ全般に共通するようだが、現在の社会と国家にたいする評価・期待がもともと低く、したがって、怒りや要求が受け入れられなくても「あきらめ」ず、自分たちの運動に高い価値をおいている。この間の運動が、ある種のカウンターカルチャーとして受け止められているのかもしれない。

大学生等が、ひどい貧困を自分（自分たち）の問題として、強い怒りを表明するというこうした事態には、いくつかの背景があるように思われる。

第一は、低賃金と貧困の拡大である。大学で学ぶ階層の家庭にまで深刻な貧困がおよんでいる。

第二は、大学進学率の上昇によって、ただでさえ収入が大幅にへっている中間層のなかで、経済的に無理な大学進学、したがって、多額の奨学金ローンと過重なアルバイトを余儀なくされる学生がふえた。非正規激増と賃金水準の大幅低下は、新たな学歴格差となって現れているため、高卒後の進学への社会的圧力が大きく拡大したのである。学生の貧困経験、無理な労働の経験は大幅に拡大している。

第三に、貧困経験をもつ学生が増えたことによって、貧困経験者あるいはその同伴者でそれを言葉にでき、怒りを表明できる人々が増加した。

第四に、これはまだ仮説の域をでないが、民主党政権が断片的、部分的ではありながら、社会保障によって生活を改善する政策を実行したことの影響である。その流れは部分的に現在でも生き続け、若者が貧困を不当だとみなし、怒りを表明する際の、意識的あるいは無意識的なよりどころを拡大した。この点で、公立高校授業料不徴収（現在は所得制限がついているが）は、高校までの就学保障と生活保障という国民的課題の扉を開けたのだと思われる。これは大学生の就学保障と生活保障よりも低い水準の課題だが、参照の基準にはなりうる。貧困が不当だという「怒り」には、多くの場合、なんらかの参照基準が必要なのである。

以下、高校生の就学保障と生活保障にかんする近年の動きを概観して、こうした新たな国民的課題へのアプローチが広がっていることを確認したい。

前史だが、2005年からは生活保護を利用しながらの高校就学が認められている。これは、高校卒業が「健康で文化的な最低限度の生活」にふくまれることの公式の認定であり、貧困が＜肉体的生存困難＞の水準でイメージされることが少なくないこの国で、貧困基準の社会的合意のための広汎な討論ができる、重要な材料である。

民主党政権の公立高校授業料不徴収に連動して、私立高校の授業料にも公立と同額の補助ができるが、世帯収入に応じた加算がある。この加算分は2014年から、最高で公立授業料の2.5倍までとなった（それまでは2倍）。さらに、私立高の授業料に不足する部分への補助が学校の減免措置への都道府県の基金からの補填という形で出せるようになっており、くわえて、不十分ながら就学援助に類似した給付もできている。

高校生の医療だが、国民健康保険の保険料滞納による保険料返納・資格証明書交付世帯にあっても、2010年から、高校生までの子どもには短期保険証が発行されることになっている（2009年では中学生まで）。

子ども医療費助成の制限年齢も早いスピードで上昇している。2014年4月現在では、中学までを対象とする自治体は、通院1134、入院1370（2009年は345と516）であり、

高校生までは通院 201、入院 215（2009 年は 2 と 1）であり、ここ 5 年間の伸びは急速である。県レベルで高校生までを対象としているのは福島県だけであり、むしろ、小さな自治体レベルでの速い改善である。各県の HP で確認できた 2015 年後半の数字によれば、高校生までの子ども医療費助成を行っている自治体が多い県は、福島県 59/59、長野県 41/77、石川県 13/19、北海道 32/179 などである。

児童手当は、民主党政権でようやく中学生まで対象とされたが、高校生までという政策はまだ出ていない。高校生までを子ども医療費助成の対象にする措置は、高校生までの生活保障の初歩的な施策の一つにすぎないが、安倍政権下でも、こうした動向が進んでいることは興味深い。高校までの就学保障と生活保障は、国民的課題になりかかっており、社会的合意がゆるやかに進んでいると評価してよかろう。民主党政権の公立授業料不徴収は、国民意識の背中を大きく押した施策であり、おそらく、貧困にたいする現在の若者の怒りの表明は、そうした政策とそれに背中を押された国民意識を背景としているのだと考えたい。

（ごとう みちお、研究所副理事長・都留文科大学名誉教授）

【副理事長のページ】(No. 53)

「お世話になりました、今日は失礼して家に帰らせていただきます」

高柳 新

「お世話になりました、今日は失礼して家に帰らせていただきます」。自分の家にながらこんなことを言う患者が増えている様だ。なかには、自分の娘が財布を盗むと訴える老婆もいる。僕の義母は長生きで 101 歳まで元気であった。「♪箱根の山は天下の嶮〜」など最後に寝込んだ時もきちんと歌っていた。ところが、晩年には夕方になると 30 数年前に亡くなった夫を迎えによく外に出ていた。たそがれ時になると外の電信柱に寄りかかり「お父ちゃんを待っていた」。医学の言葉では「夕方症候群」、「夕暮れ症候群」という。雨の日に傘をさして、庭の草木に水をかけている患者の話を読んだことがあるが、人間の不思議な内面を見る思いだ。

今僕の外来は担当の糖尿病患者、それに正月明けからのインフルエンザ、高血圧、消化器内視鏡と忙しい。永山や、八王子の外来の日には半日で 40 人前後、50 人近い日もある。1 時間に 10 人のペースで診察しているのだから、午前中には診察は終わらない。「捌きれない」といった感じだ。昼飯を飛ばす、診察の合間にスーパーのにぎりめし、カップ麺のときもある。

こんな調子でせわしく 1 週間が過ぎている。これらの患者群のなかに精神疾患、認知症などが増えている。更年期後の女性のパニック、不安障害、そして老人精神疾患。いちいち、メンタルクリニックに紹介しているわけにもいかないし、気軽に、しかも信頼して送るクリニックも知らないで、何とか自分で取り組みはじめた。

外来に来る最長老は 97 歳の婦人だ。大腸癌の実後の管理と高血圧。顔を見て診察し、おしゃべりをして。そして 2〜3 度笑わせて終わる。90 歳以上だけでも 10 人はいる。若い時分の肺結核が再燃して府中の都立医療センターに入院して元気になり帰ってきた T

さんは、しばらく、外来にいつも付き添ってくるとも優しい親孝行の娘に「財布を盗まれる」といつていた。妄想である。原因は結核薬のせい、入院のストレスか、認知症かはわからないが、アリセプトという薬、週2回のディケアー、そして僕の外来でのおしゃべりで、妄想は消え元気になっている。僕が診ている高齢者は外来に通えているのだから元気な人たちだろう。もっと大変になれば、S先生の在宅医療の対象者になる。

老人医療、老人精神医学は新しい学問だといわれている。本気で研究され始めてまだ間がない。高血圧症一つとっても、80歳台、90歳台の人の血圧はどの位を目標に管理すればいいか、はっきりしたものはない。年寄りの患者は自宅で血圧を測りとても不安になりよく駆け込んでくる。たいした基準があるわけではないが、血圧が200を超えているようなことがないときは、鷹揚にそして自信を持った雰囲気、**「全く心配ありませんよ」**と安心させている。

高齢者の精神科となれば、もっと深刻で新しい。アルツハイマー病などといえればかなり解明されている様に聞こえるがこれからだ。研究も遅れているが、患者を抱えた家族の介護はきわめて深刻。老老介護はざら。僕が診ている老夫婦は奥さんが軽い認知症、80過ぎの夫がいつも外来に付き添ってくる。その奥さんが軽い認知症を抱えながらまだ介護の仕事を続けているのだ。

認知症 800万人時代といわれている。調査のたびに増えている。政府は財政政策を第一に危機感を募らせ、高齢者の命暮らしを守る責任を放棄し、またぞろ認知症患者を家族に、「地域に」押しつけることを考えている。地域で頑張るのはもちろんだが、国や自治体の責任を発揮させる戦いと結びつけながら頑張る必要を痛感している。

(たかやなぎ あらた、研究所副理事長・全日本民医連名誉会長)



●事務局からのお知らせ

1. 2016年度定期総会は6月18日(土)開催予定です

時間や会場など、詳細は改めてご連絡申し上げます。

2. 年会費納付のお願い

2015年度年会費、あるいは過年度会費も含めて未納の方は、出来るだけ3月末日までに納付下さいますようお願い申し上げます。

●事務局日程一覧(11-1月)

【11月】

10月31日～11月8日 イギリス視察調査

13日 大正大学ゼミ生訪問

13日 第3回事務局会議

20日 第3回理事会

30日 研究所ニュース No. 52 発行

・イギリス視察実施、資料整理

・機関誌 53号編集

・ニュース No. 52 編集

25日 機関誌 53号発行

・機関誌 53号編集

・イギリス視察資料整理

【1月】

08日 第4回事務局会議

15日 第4回理事会

・機関誌 54号編集

・イギリス視察報告書編集

・第三四半期決算、法定調書送付

・年会費確認、会員名簿整理

【12月】

19日 ロバート・オウエン協会研究集会後援



【本の紹介】

●安井豊子『CVA（脳血管障害）保健医療 ソーシャルワークと人権』

2016年1月、風詠社(2500円+税)

会員の安井豊子先生（敬和学園大学教授）から新刊案内を頂きましたので、ご紹介いたします。章名のみでは内容がお伝えできないと思ったので、目次を詳細にご案内することになりました。なお本著は、「敬和学園大学学術図書出版助成費」にもとづき出版されたものだそうです。

【目次】

序章

第1章 生存・生活権保障と保健医療ソーシャルワーク

1. 社会福祉における生存・生活権保障
2. 保健医療ソーシャルワークにおける生存・生活権保障

第2章 保健医療・福祉政策と保健医療ソーシャルワーク

1. 日本の保健医療・福祉政策と保健医療ソーシャルワークの動向
2. 日本の近年の保健医療・福祉政策の動向

第3章 保健医療・福祉政策がもたらした保健医療ソーシャルワークプロセスの変質

第3章 保健医療・福祉政策がもたらす CVA 患者の保健医療ソーシャルワークの現状と課題
—ソーシャルワークプロセスの中断化・分断化の視点から—

1. CVA 患者の保健医療ソーシャルワーク
2. 介護保険制度導入後の CVA 患者の保健医療ソーシャルワークプロセスの現状と課題 — 調査①—
3. 第4次医療法改正後の CVA 患者の保健医療ソーシャルワークプロセスの現状と課題 — 調査②—
4. 第5次医療法改正後の CVA 患者の保健医療ソーシャルワークプロセスの現状と課題 — 調査③—

第4章 保健医療・福祉政策がもたらす CVA 患者の保健医療ソーシャルワークの分断化から
連続性に向けて —MSW の CVA 地域連携クリティカルパスへの介入への視点から—

1. CVA 地域連携クリティカルパスについて
2. CVA 地域連携クリティカルパスへの MSW の介入状況について —調査④—
3. CVA 患者の地域連携保健医療ソーシャルワークパスの構築にむけて —調査⑤—
4. CVA 保健医療ソーシャルワークのシームレス化に向けたシステム構築の構成要素 —保健医療・福祉政策の展開を射程において 調査⑥—

第5章 政策的展開を見据えた CVA 保健医療ソーシャルワークの構築に向けて —技術論、
政策論の統合的視点から—

1. 技術論、政策論的視覚からの検討
2. 技術論、政策論の統合的視点にもとづく CVA 保健医療ソーシャルワークの構築に向けて

終章

（以下の案内文は、風詠社ウェブサイトより引用） ISBN: 9784434213953

障害を持つ人、とりわけ脳血管障害の医療現場において、人間の尊厳や生存・生活権の保障に取り組む保健医療ソーシャルワークはどうあるべきか。

人生・生活の危機に直面する人が、真に必要とする援助のあり方とは。技術論と政策論との統合的視点の重要性を説き、これからの方向性を展望する。



「空想から科学へ」

石塚 秀雄

● エンゲルスの『空想から科学へ』は、1880 年に出された。正式には、『社会主義の発展。ユートピアから科学へ』である。最初はフランス語で出版された。もともとは 1876 年から連載された『反デューリング論』の中から、フランス労働者階級向けのパンフレットとして抜き出したものを、マルクスの娘婿である P. ラファルグの手を借りてフランス語に訳したものである。デューリング批判を書いた理由は、デューリングという学者の著作『国民経済学および社会主義の批判的歴史』などの知ったかぶりを批判し、その悪しき影響力を排除することであった。当時、1875 年にマルクスとエンゲルスは、ドイツ社会民主党の「ゴータ綱領」批判などを書いて、ラサール派などを批判していたのである。デューリングの哲学、経済学、社会主義についての言説は、左翼の中にも一定の影響力があると思われたのである。しかし、『空想から科学へ』は、これはこれで独立した文献だといってよい。何しろ本文にデューリングの名前はまったく出てこないからである。つまり、フランス人にとってはデューリングって誰?ということだし、またドイツ社会民主党における事情も 1880 年代に入って変わっているということであったろう。

● ところで、よく言われるように、『空想から科学へ』の言いたいことは、空想的社会主義はだめで、科学的社会主義がいいのだ、ということではなかった。『反デューリング論』は、ケネー、スミス、ヘーゲル、ダーウィン、ルソーそしてオウエンやフーリエなど、デューリングが引き合いに出して否定しゆがめていることについての反論で、彼らの諸言説を科学的(学問的に)に評価し、デューリングのでたらめぶりを排除することであったと思われる。ちなみにデューリングは、オウエン、フーリエ、サン=シモンたちを「社会的錬金術師」と揶揄している。それによれば、フーリエはその名前のおり「狂気(フー、fou)」の人間だし、サン=シモンは自分を「聖人(サン、saint)」と思っている誇大妄想人間だし、オウエンは「ああ、悲しいかな(オーウエー、o-weh)」ぼやけて貧弱な観念の持ち主なのであった。エンゲルスが『空想から科学へ』の第一版序文(1882)の中で、「吾々ドイツの社会主義者は、ただにサン・シモン、フーリエおよびオーウエンを祖とするばかりでなく、カント、フィヒテおよびヘーゲルの流を汲んでいることを、吾々の誇りとするものである」(大内兵衛訳)と書いているように、科学的社会主義のルーツの一つはユートピア社会主義であったのである。

いわゆるユートピア社会主義と呼ばれる彼らが、自らをユートピアンと呼んだ訳ではない。ユートピアという言葉は、トマス・モアの『ユートピア』(1516)という架空理想社会像によってよく知られるが、下ってエンゲルスの時代においては、ウィリアム・モリスの『ユートピア(nowhere)だより』(1890)もある。ユートピア論は、いつもそのときどきの現実社会の反措定として描かれた。いわゆるユートピア社会主義者が活動したのはフランス革命前後すなわち、1800 年前後のヨーロッパであった。それは産業革命が起り、封建的旧体制(アンシャン・レジーム)からブルジョア的新体制に移行する過渡期であった。過渡期と簡単に言うが、それは後追いの定義付けでであって、その時点では、先行きオタマジャクシが何になるのかは、誰もはっきり言うことはできないのであり、それ

ができるのは予言者であり透視家(ビジョナリー)でしかないであろう。

● フーリエやオウエンの 1800 年代は、産業革命が進みはじめ近代的工業が展開しつつあり、封建的旧体制は崩壊しつつあった。ブルジョアの自由主義がその理論的支柱となり始めたが、工場という分業体制が確立する以前に、当然ながら労働者階級は形成されていなかった。このブルジョアのヘゲモニーあるいは専横に対して、理性の時代の名の下に対抗しうる考えは、人間解放の理念の具体的適用であった。フランス革命は、人および市民という概念を定着させた。エンゲルスが書いているように「1802年にサン・シモンのジュネーブの手紙が現れ、1808年にはフーリエの最初の著作が現れた。1800年にはロバート・オーウェンがニュー・ラナークの管理を引き受けた。しかし、このころには資本主義的生産様式も、それにとまってまたブルジョアジーとプロレタリアートの対立もきわめて未発達であった」のである。

当時のヨーロッパの思想の中心は、調和(ハーモニー)であった。社会的矛盾をいかに調和させることによって、公正な新しい社会を作ることができるかが大きなテーマであった。産業主義がそのスローガンといえる。オウエンのアメリカでの実験村は「ニュー・ハーモニー」と名付けられたし、フーリエの共同体ファランステールの建物も左右対称の調和をもったものであった。あたかも貸借対照表のように、左右が等式で結ばれることは、需要と供給、生産と消費、都市と農村との相関関係や矛盾の克服を示すべきものようであった。また、近代的国家すなわち国民(民族)国家はまだ存在しなかった。つまり空想的社会主義の時代になく科学的社会主義の時代にあった現象とは、産業資本主義の台頭と国民国家の登場であり、新しい社会階級としての賃金労働者階級の形成である。昔を今の基準で評価することは、ないものねだりである。たとえば、アリストテレスは飛行機を知らないので、現代人より物知らずだなどと言うのは馬鹿げている。進化論からすれば、ギリシャ彫刻は現代彫刻に劣るということになるのであろうか。たしかに、ものごとが時代の制約を受けるものだという思想自体が近代思想かもしれない。

空想的社会主義が、社会において国民国家の機能を思案の埒外において、共同体(経済と生活の両方を実現するコロニー)を実践したところに、その優れたところがあるであろう。それは、サン=シモンが言うように、人々は生産的労働をする産業者であり、労働を通じて個人は自己実現をするという考えは、マルクスとエンゲルスが描く、共産主義社会の姿でもある。

● エンゲルスが『反デューリング論』を書いた 1880 年前後の、科学的社会主義理論における議論の目標のひとつは、デューリングに象徴されるような、資本主義や国民国家の発展変化が進んでいるにもかかわらず、空想的社会主義者たちからも、もっと遅れた程度の低い経済コンミュンが可能であるかのように説く「エセ社会主義」の影響を粉碎したいということであったに違いない。『空想から科学へ』が、ちょっと見、ユートピアン批判のように見えたりするのは、フーリエやオウエンたちを批判することではなく、彼らを揶揄しているデューリング自身が、ユートピアン以下の妄想主義であり、残念なことにそのような俗流科学が社会主義理論でも一定の支持を得ていることに対する反論であったであろう。マルクスの『ゴータ綱領批判』は、短いものであるが、ラサール派たちが国家というものを当てにして、労働の解放をしようとしていることに反論している点が重要だと思われる。ラサール派は協同組合を国家支援に基づいて作るというのに対して、マルクスは協同組合は国家から離れて(すなわち、労働者の自主的共同で)運営することに意味があると述べている。すなわち、『ゴータ綱領』をより良く読むためには、

『空想から科学へ』とさらには、それのもっと詳しく語った『反デューリング論』に目を通すと良いと思われる。

● しかし、マルクス・エンゲルスたちが、どのような未来社会を想定していたのか、あるいは社会はどのように考えていたのか、ということを実時点と考えてみると、一つの隘路は、やはり国家論であっただろう。マルクスは未来において、「国家は廃止されるのではなく死滅するのである」といい、そのとき、唯一残った労働者階級もまた自己止揚するとき、社会的労働の形態がどのようなものになっているのかは、明確ではない。共同所有が国有企業であるという実験はロシア革命以後この100年の経験から見てうまくいかなかった。簡略すぎる言い方になるが、ユートピアンたちは新社会（的所有）を考えたが、国家（的所有）は考えなかった。マルクス、エンゲルスは新国家（的所有）を考えたが新社会（的所有）の決め手は考えられなかった。というより、科学的精神により、わからないことをわかったように書くということはしなかったのであろう。階級闘争を想定し、そして階級の消滅とともにその終焉の未来を迎えたときに、どのような社会を想定していたのか、社会的労働の形態は共同所有、国有企業という形態をとるべきだとしても、国家が死滅した後はどうなるのか。必然の王国から自由の王国になるとき人間はどうあるのか、というのは、人間的存在の自己実現、簡単にいうと諸個人がどうしたら幸せになれるのかという願望においては空想的社会主義も科学的社会主義も同じビジョンだと言えるのではないであろうか。

● エンゲルスは、自分たちはまたフィヒテやヘーゲルの流れを汲んでいると述べているように、科学的社会主義もやはり時代の子であって、国民国家のプログラムをその歴史的必然の不可避的プロセスとして、すなわち、未来社会の過渡期として是認していたのではないであろうか。フィヒテは、ナポレオン侵略に対して『ドイツ国民に告ぐ』において、教育によりドイツ民族の独立を目指すことを主張した。しかし、私としてはマルクス、エンゲルスの思想は、一般に思われているような「科学的社会主義」や一国社会主義（民族的社会主義）というよりも、もっと広く深いものに見えるし、インターナショナルな視野をもったものだと思われるが、それでもやはりドイツ思想の流れを汲んでいるものだと思われる。

彼らの思想の全容をつかむほどの読解力はないが、「俗流」科学的社会主義のイメージを作り上げた大きな要因として、いわゆる『マルクス・エンゲルス全集』の中にある膨大な「編集者注」という解説や、学者たちのマルクス、エンゲルスの著作に対する解説論文があると思われる。つまり、マルクスやエンゲルスが言っていないことまで、さも言ったかのように教条的に解説する、いわば「主人思いの引き倒し」のたぐいである。マルエン全集の読者はこのスターリン時代の教条主義的なねじ曲げ解釈に、知らず知らず、あるいは、教科書的に信頼して読んできた嫌いがあるのではないかと、我ながら反省しているところである。わかりやすい解説よりも原文そのものを読むことが大事だと自戒する今日この頃である。

(いしづか ひでお、研究所主任研究員)



「ようこそ文化のリッチな東ロンドンへ」

竹野 ユキコ

昨年 11 月、研究所では全日本民医連・保健医療研究所と共催でイギリス視察を実施した。視察先はロンドンとイングランド北東部のサンダーランド・ニューカッスルで、訪問したのは制度改革が進む NHS ファンデーション・トラスト、高齢者や若者向けの社会サービスを行う社会的企業、中間支援組織などであった。視察詳細については現在鋭意進行中の視察報告書を読んでいただけたらと思うので、ここでは途中に立ち寄った東ロンドンの様子を書きとめたい。

タイトルはロンドン東部、タワーハムレッツ地区にある中間支援組織「アカウント 3」を訪問した際に、出迎えてくれたスタッフのシェリファさんが視察団を歓迎してくれた言葉である。「アカウント 3」は 20 年前に、移民が多く住む貧困な地域で社会的困難を抱えた女性たちの支援を目指して創設された。女性のための英語教室（行政の行う英語教室があったが、移民女性たちが男女同室になるクラスには行けないと拒否した）から始まったさまざまな活動は、多くの女性の起業や就労を支え、保育園を運営し、その保育園は国の監査機構から高い評価を得て拡大している。現在では女性だけでなく、男性にも就労支援のアドバイスを行っている。長年にわたる交流がある中川理事長のニュース「理事長のページ」や『社会的企業とコミュニティの再生』を参考文献として紹介し、視察に臨んだが、つねに貧困と闘う姿勢をと無意識に期待していたのかもしれない。

東ロンドンは今現在、金融の発達により世界の富が集まるというのに、EU でもっとも貧しい地域となっているという。もちろん、後からこうした厳しい現実と闘っている日常を伺ったが、視点を変えれば、歓迎の言葉どおりに東ロndonは豊かな文化と歴史を持つ地域と表現できる。果たしてこういう視点を日頃の生活でもてるだろうかと考えさせられた、ある意味では出鼻をくじかれた挨拶だった。

「アカウント 3」を視察したあと、昼食時のパブで通訳のミキさんに「東ロンドンを見たいという人が多いが、案内をしてもらえないだろうか」と依頼した。急な依頼にもかかわらず、英国公認のガイド資格を持つミキさんはその場でルートを考え、「OK」と快諾して下さった。こうして希望者が連れだって、ミキさんを先頭に東ロンドンを見学することになった。

案内していただいたのは、リバプールストリート駅からオールド・スピタルフィールズ・マーケットや教会の周辺、ペチコート・レーン、ブリック・レーンなどを通り、コマーシャルストリート沿いにあるトインビーホール、ホワイトチャペルのあたりである。街中での案内には、旅行社から渡されたイヤホンガイドが非常に役立った。

リバプールストリート駅を背にして一方を向くと、新しい金融オフィスの近代的なビルが林立し、もう一方を向けば歴史的な古い町並みが目に映る。遠景に最先端のビル、近景にレトロな建物といった、古くて新しいロンドンを象徴するような渾然とした風景を作っている。アカウント 3 で聞いた地域住民の住宅問題と関係するが、家賃高騰でロンドン市内から転居する人が増え、近年は新たなアートの発信地となっているということだった。通りがかったクリーニング店の看板を見るととても安価であり、ここはやはり物価が安いのだろうと説明を受けた。大勢のビジネスマン・観光客らしい人で賑わう

が、マーケット開催日は更に人の往来が多いという。

マーケットの開設は17世紀と聞いて驚く。曜日によって若いアーティストたちによるハンドクラフトなどの店が並ぶそうだが、この日はあまり店は多くなかった。それでも物珍しく見ていると、ミキさんから「ここはスリがとても多い」と注意喚起があった。事務局としてビデオ記録もしようとしていた私は、ななめがけした鞆に入った現金をかなり心配しながら進んだ。

ニューカッスル大学ロンドンの横を通り、翌日夜に行くニューカッスルへ思いをはせながらミドルセックス・ストリートに入ると、織物関係の小さな古い店が立ち並んでいた。このあたりは17世紀のユグノー戦争時、フランスから織物職人が亡命してきたという。移民が多い地域でもあり、店頭にはエスニックな色使いの布や民族衣装が多く展示されていた。

ペチコート・レーンの露天販売は衣服がほとんどであり、名称は女性の下着を売っていたことに由来するという。パキスタンやアフリカ系と思われる人々が多く、かつてはユダヤ人街でもあったそうであり、ブリック・レーンはかつてのレンガ産業の名残の名称だが、現在はバングラデシュ系の人々の中心だという。建物の壁には、さまざまなグラフィティアートが並んでいた。

この地域はテムズ川沿いで産業革命によってもたらされる運河で働く荷役が多く住んでいたこともあり、貧困や失業の問題が切り離せない場所となった。また切り裂きジャックの事件が起こった地域だという。そうした貧困地域に大学へ行くような上流階級者が移り住み (settle)、貧困を目の当たりにし援助をする、セトルメントハウスが作られる。トインビーホールである。

ミキさんは歩きながら上記の説明をしていたが、いきなり足を止めるとある建物をさっと示し、「はい、こちらです」と言った。参加者は「トインビーホール」という小さな表示を「おおっ」と思わず声を出しながら見上げた。その後も視察中、説明と場所とを合わせるプロの技術に大いに感銘を受けた。

アカウント3のシェリファさん自身、20年前にフランスから来たという。フランス革命の時の貴族、その前のユグノーたち、ユダヤ人、インド独立時のバングラデシュ人など、東ロンドンが受け入れてきた人々は枚挙に暇がない。ちょうどロンドン・オリンピック前となる2000～2010年頃は、ロンドン市内の土地家屋が高騰し、市内には住み続けられずロンドン出身者たちが移ってきた。アーティストなどの新しく移ってきた人々が中心となり、新しい文化の発信地ともなる一方、元から住んでいる人々と後から入ってきた人々との経済格差から不満が生まれている。フードバンクで子どもをやっと養う人々がいる地域で、新しく入ってきた人によってシリアルに5ポンド (約1000円) 近くを支払って食べられるカフェが作られ、すでに2店舗に増えて大人気だという。2015年9月にはブリック・レーンのこのカフェ襲撃事件なども起きた。

帰国してから知ったことだが、このような「ジェントリフィケーション」を労働党の党首は「ソーシャル・クレンジング」という言葉で語っているそうだ。地域が豊かになることと元からの住民が豊かになることが同時に進む方法はないのか、模索が続いている。

(たけの ゆきこ、事務局長・研究員)